

## 令和3年度第2回大阪府立江之子島文化芸術創造センター指定管理者評価委員会概要

日 時：令和4年1月17日（月）15：00～17:00

場 所：江之子島文化芸術創造センター 2階 room8

出席者：服部委員長、佐藤委員、坪池委員（オンラインにて参加）、西田委員、米山委員、指定管理者、事務局

### 【議事概要】

#### 1 開会

#### 2 議題

（1）江之子島文化芸術創造センター指定管理者の評価について

（2）その他

#### 3 閉会

### ◎主な意見等（意見交換）

服部委員長：自己評価及び施設所管課（文化課）の評価を踏まえ、意見交換をお願いしたい。最後に評価委員会としての指摘提言を取りまとめたいと思っているので、ご意見をいただければ。

佐藤委員：ご説明いただいた中で、ラスト2年間というのは、想定外の対応や、企画しても中止になるかも知れないという不安のなか進めていたと思う。その中で出来ることを、想像以上に工夫していた。苦労もあったと思うが、とても頑張っていたと思う。

どうしても数値目標を決めなくてはいけない部分があり、目標の20～30%目処プラスがあったかという点、文化課が「A」という評価と考えているのも、もっともだと思うが、指定管理者自身が、「S」だと自信を持って自己評価していることは、私も異論はないと思っている。

子どもたちが主体的にアート活動に参加し、来館していることは、とても大事なことだと思う。文化課との話でもあったが、家庭の環境や経済的な状況に関係なく芸術に触れ合えるというのは、とても素晴らしいことであり、重要なことだと思う。その点が根付いたということは非常に良いことであり、次期指定管理者にも、ぜひ引継いでもらいたい。

芸術の団体や若手アーティストたちの支援というのも、取組みとして、具体的に厚くなったと感じている。この点についても、次期指定管理者に引継いでもらいたい。

服部委員長：今回、指定管理者の運営の中で、enocoの可能性を最大限に活用していたのではないかと考えている。

西田委員：指定管理者の自己評価が、「S」とされているということで、自信と、それなりの達成をしてきたという自負があるのではということがよく分かる。第1回目の評価委員会の時に、重点項目の中で、「人的ネットワーク」という点について質問をしたが、今日の説明を聴く中で、enocoの人的ネットワークは、すごいと感じた。

特にenocoと創造的活動を協働した個人や団体という項目があるが、コロナの影響がない場合の目標の達成率が12月末現在で、96.7%であり、コロナの影響を受けた場合の目標の達成率は193.3%となっている。元々指定管理者が持っていたり、築かれたネットワークがすごかったと思う。引続き次の指定管理者にも頑張ってもらいたい。

事業の三本柱という点でも、非常によく達成できていたと思う。

定性的な評価と定量的な評価という点で、定量的なところは、非常に分かりやすいが、定性的な評価という点について、総評の部分が、府の評価が「A」ということで、細かいとこ

ろをみていった時に、定量を通してからの定性の評価の割合をどういう風に判断するのかというところが少しあるかと思う。

服部委員長 : この会議でも定性の評価について、これまでも議論してきたが、デジタル革命以降の進化のような点で考えていくと、定量は分かりやすいが、定性の部分が分かりづらい。今回、子どもたちの主体的な関わりが見られたことや、現在 社会でかなり評価されているいわゆる「Z世代」が参加してくれている。しかもポッセとしてボランティアに参加してくれていることは、まさしく定性の評価ができるのではないかと思う。

米山委員 : 説明を聴き、関わった者としては、非常に嬉しく、ここまで来れたんだな。という印象を持った。

コロナの環境の中で、こういう実績を残せたというのは素晴らしいと思う。

目標の数字に関して、もしも次年度コロナが収束した場合に、実績の数値があまり変わっていないということになると、コロナの影響を受けた実績なのではなく、例えば参加者や関係者の属性が固定されている可能性もある。今回、コロナの影響で達成できなかった面はあると思うが、実情に合う形で次年度の目標を設定していただければと思う。

坪池委員 : 総評的になるが、私はすべての項目で「S」でいいのではと思っている。2期10年目の最後の時期に台風に遭ったような状態。これまでの試行錯誤を形にしていく時に台風が来てしまったと思えば、その成果は評価云々のレベルを超えているというのが、正直なところ。

enocoという施設は、古い建物を改修し、美術品の収蔵と新しいことに取組むという一種の社会的実験を行うような文化施設としてスタートしたと承知している。大きなイベントで集客があればいいということではなく、多品種少量生産のようなことを続けていくということで、評価の仕方も難しい。

協働した団体等のリストには、貸館を利用した団体の名前や若いアーティストが明記されており、令和3年度に、いろいろな人たちと関わりを持っていたと思うとそれだけで、感動した。それらの個々の人たちと信頼関係を構築しながら、結果どうなるか分からないものを一緒にがんばる。という中で繋がりが生まれており、その人たちとの関係は、本当に宝物だと思う。

次期の指定管理者が別の団体になると聞いているが、これまでと持っているものが違う人たちが、管理者になり新しく運営するというので、これは私の哲学としての考え方が、引継ぐ必要はなくてよいと思う。せっかく新しい指定管理者になって、何かを産み出そうとしている人たちに対して、持っているものが違う人たちに違うことを求めてしまうことになるので、文化課と新しい指定管理者の形を考えていけば良いのではと正直思う。

ただ、この10年間でenocoの中で培われてきた、いろいろな人たちとの関係や、子どもたちとの関係について、一定の評価をしており続けていきたいと考えるなら、新たな文化課とのパートナーシップなりを議論していく方が、いいのではないかと思う。

文化というのは、人間との付き合いだが、現状では、管理運営費としてしか、予算が動かない。いろいろ芽があり、蓄積があっても、それを動かすための資金というのを、そんなに簡単に準備できない。現指定管理者が施設の運営を離れた時に、新しい立場やソフト面でこれまでの活動や人間関係が、どんどん展開していくことを期待したい。

服部委員長 : 坪池委員もコロナの影響から指定管理期間を1年延ばすという選択もあるのでは。ということをおっしゃっていたが、トライアル&エラーが上手く実施でき、その蓄積と人的資

産というのを見られてよかった。

では、利用者満足度調査等について、数値では表されているんですが、具体的にどのような意見があったか説明願います。

指定管理者 : 子どもたちが作成してくれた「アンケートをお願いします」というような掲示物を見て、ふらっと来館した他の子どもたちが覚えてたの字で「enoco 楽しいです」「〇〇をみたけど、おもしろかったです」など、アンケートを書いてくれた。企画展に関しては、毎回アンケートを、熱心にご記入の方が多い。「こんな場所があるのを知らなかった」「大阪府がこんなにコレクションを持っているとは知らなかった」「コレクションがあるということをもっと知らせるべきだ」というような意見があった。

服部委員長 : 館長は、来館者の方とコミュニケーションをとることもあるかと思うが、どういった方がいらっしゃっているのか。

指定管理者 : 「おしゃべり picnic」にゲストで参加してもらったアーティストが、続けて「enocoのバンパク」にも参加することになり、実際にenocoに来た際に「自身の新しい作品の撮影現場として、enocoを使えないか？」というような話があり、実際にenocoを使っていた。

プラットフォームに関する相談も、いろいろ来ており、アーティストやデザイナーなどクリエイティブな人と関わるきっかけを作ってほしいという要望もある。

服部委員長 : 「ネットワーク」「教育」「プラットフォーム」というテーマを掲げてやってきたが、enoco式というのが上手く出来上がったと思う。enocoでやっていることが、文化施設における水準になっていると思う。

服部委員長 : 「収支計画について」、こちらについては米山委員に財務諸表等をご確認いただいているので、米山委員ご意見を願いたい。

米山委員 : 提出資料からは施設運営上の問題は発見できなかった。

服部委員長 : ここからは、みなさまと意見交換の時間とします。

西田委員 : 評価票 10 ページの「府の施策との整合」というところで、文化課の評価で「enocoにおいても認知しているものであることから、府立の文化施設として、広報連携のみではなく、より積極的な内容で連携できるような企画の工夫があれば、なおよかった」というのがあるが、元々そういう事業を文化課から、指定管理者へ依頼していたということだったのか。

文化課 : 事業計画において、「文化芸術フェスティバルとの連携を検討する」と明記されており、enoco主催の展覧会を文フェスの参加プログラムとして申請し広報の連携は行ったが、文フェスは、ここ数年文化課としても力を入れている事業であるので、例えば万博記念公園での文フェスのイベント時等にenocoから出張ワークショップを行うなどの広報に留まらない、積極的な連携ができれば、なおよかった。ということ。

西田委員 : 定性的な評価というところで、確認させていただいた。

具体的な感想として、非常によくがんばっていたと思う。学校の授業もまさにそうだが、文化や芸術などを活用しながら、まちづくりをしたいという声が商工会議所にもたくさん届いており、そういう中でenocoの役割というのは非常に大きいのではと思っている。民間の事業者や、まちづくり団体でも、アートを利用したい、視点を入れていきたいと、皆さんの関心が高いと思っているので、今後も引き続きご尽力いただければと思っている。

佐藤委員 : 自治体が、どんどん元気になってほしいと思っている。私は、プラットフォーム事業が好きだったが、(enocoから自立した)NPO 法人として同様の事業が出来そうで、非常によか

ったと思う。

米山委員 : 事業内容に重きが置かれ活動が充実し、来館者が増加するという事は、より一層安全性の確保が必要になると思う。指定管理者の交代時期であることから、安全を図るためのマニュアルや、避難訓練、所蔵作品の展示等にあたっての防犯対策等の資産の保全のような面についても、検討いただければと思う。

坪池委員 : 地域創造の最新号で、コロナを踏まえ、レジデンスについて特集した。公立文化施設で、もっと、じっくりゆっくり地域と向き合うということを考え直した方がいいのではないかと、レジデンス特集ともう一つ、「ウェルビーイング (well-being) よりよく生きる」ということを特集した。公立文化施設が、よりよく生きるということにどれだけ貢献できているか。文化の専門施設なので、文化的な事業を行うのも一つの柱だが、これだけ厳しい世の中になってくると、個々人がちょっとずつよりよく生きるというために公立文化施設は何が出来るのか。

これだけ格差が開いてきた中では、社会教育施設の役割を豊かな国を代表する芸術文化の専門施設ではなく、もう少し今の社会状況に見合った施設のあり方というのが、きっとあるだろうなど。enocoがそのトップランナーとして、実は10年間いろいろ試行錯誤してきたところがあったのではないかと。都市部の実験的な取り組みをやってきた施設として、現指定管理者は、施設の運営から離れても、今までの培ってきたものも使って、皆がよりよく生きるためのいろいろな活動を始めていただけると嬉しいし、公の施設として、公金が使われてきた施設の結果が社会に還元される一つのタイミングになってきたのではと思う。

服部委員長 : 府民や、暮らす人々に向き合いながら発信し続けなければならない立場の者の次のミッションがあるのではないかなと思っている。以前は、予定調和でなんとなく想像していたことに対して、お金を払うという府民や消費者の人がいたと思うが、これからは、体験の質感が以前とは全く違うものを求める人たちが増えるのではないかなと思っている。予定調和ではないことをどのように仕掛けるか、空間や時間や芸術といったものも提供していかなければならないので、しっかり設計すると、予定調和がやって来るのかも知れない。設計の緩やかさみたいなものが、今回enocoで運営されてきたプログラムの随所に仕込まれていたのではないかと。その緩やかさは、お客様との関係性がより近くなる余白のような物ではないかと思う。これを経験した子どもたちや大学生たちは、どのような次のビジョンを描くかという、参加することによって、私たちは社会に居るんだという実感が湧いたのではないかと思う。実感が湧いたというのは、予定の調和ではないところに自分の居場所を見つけた瞬間だと思う。そういった瞬間をenocoでは5年間をかけて創ってきたのではないかと思う。

5年間そして、コロナによって時代が変わっていく新たな記録として、後世に伝えていけるような実績が残せたのではないかなと思っている。

府の事務局の方たちも、先ほど坪池委員がおっしゃっていましたが、事務局のウェルビーイング、指定管理者(運営する側)のウェルビーイング、利用される方たちのウェルビーイングを次の時代ではお願いできればと思っている。

委員の皆さまからいただいたご意見を踏まえて、事務局において評価票の評価委員会の指摘提言の取りまとめを行い、最終公表させていただきます。

今回、私も委員長という立場で、長きにわたり、委員・運営者・事務局と並走した気分で、一緒にここまでやってこられたことを、本当に感謝しております。ありがとうございました。

文化課 : 長い時間ご議論ありがとうございました。ご意見ご提言を取入れまして、評価票を完成させ、委員長と調整しまして、皆様方にお見せし、来年度当初に HP で公開いたします。